

英語学習と特別活動をリンクさせ環境問題に取り組む

谷口 雅英

1. はじめに

どうして英語を勉強するの？「国際化」が声高に叫ばれる現代社会では、こんな問いを改めて問題にする必要がないかもしれない。大学入試科目の中での英語のウェイトは文科系・理科系を問わず極めて高く、この問いは進学校においては一笑にふされるかもしれない。

しかし、「英語力を育成する」という学習活動に比べて、「英語学習の必要性を実感する」あるいは「英語を使って行動する」という学習活動が、教育現場においてあまりにも少なすぎるのではないか。「国際化した社会では日本にいても英語は必要」とか「大学入試や就職試験で英語は大切」という言葉を並べるだけでは、動議づけとしては不十分だろうし、英語学習の意義を実現する発展性も生まれにくいのではないかと考えるのである。

このような学習活動は、現在の教育のキーワードである「生きる力の育成」にも貢献する。横断的・総合的な指導を推進するために「総合的な学習の時間」が設定された。その設立の経緯には、各教科の学習成果がその教科の枠内でとどまっている、教科を超えた教科学習の真の目的を達成する必要性がある、という教育の問題があるのではなかろうか。

私は、以前勤務していた学校で、先に挙げた問題を解決するために、英語学習を特別活動と結びつけた取り組みを行った。本稿では、そのささやかな取り組みについて報告させていただく。

2. 取り組みの動機

中央教育審議会は、「国際理解教育は、各教科、道徳、特別活動などのいずれを問わず推進されるべきものである」という第一次答申を出した。しかし、「国際理解教育の推進」ということで最初に頭に浮かぶのは英語という教科であろう。

国際理解教育の理論と実践を2つに大別するとす

れば、次のようになる(佐野正之 他(1995))。

- (1) 地球上の人類の多様性を認め、その相互理解を深めようとする「文化理解のアプローチ」
- (2) 地球上の人類が直面している重要課題を平和・人権・福祉といった普遍的価値に基づいて解決していこうとする「問題解決的アプローチ」

英語という教科を通してこのような国際理解教育を推進するには、どのようなことができるだろうか。

ライティングの教科書 Polestar Writing Course (数研出版)に、「Problems with the IT Explosion」「情報技術の爆発的普及の陰に」という課があり(Lesson 8), Exercisesに「環境汚染が今日ほど深刻であったことはありません。」「もっとも深刻な問題のひとつにオゾン層の破壊があります。」のような日本語を英語で表現させる練習問題があった。

そこで、このようなテーマを扱う教材を、英語力育成のためのトレーニングとしてだけでなく、国際理解教育推進のために活用したいと考えた。つまり、この課を通じて、地球上の人類が直面している重要課題の1つである「環境問題」に取り組ませたいと考えたのである。

では、環境問題の中の何を扱うか。高校生にとって最も身近な環境問題はごみの問題である。また、ごみの問題は世界で最も頻繁に議論されている環境問題の1つでもある。ごみ問題と無関係な人はいない。生きるためには消費が必要であり、消費からは必ずごみが生まれるのだから。

3. 取り組みの軌跡

生徒たちにごみの問題に取り組むことの意義を話し、文化祭のクラス企画で実際に取り組むことをLHRで提案した。以下は、その取り組みの軌跡である。

6月 9日 文化祭クラス企画決定

6月16日 ごみ問題の学習(1)

教材：中日新聞コラム「ごみ・人・まち—ご近

所物語」

6月17日 ごみ問題の学習(2)

教材：NHK番組『世紀を越えてNGO』

6月28・29日 担任による県外視察

視察校：埼玉県立久喜高等学校、小川高等学校

7月5日 ごみ問題の学習(3)

英文テキスト『ごみと日本人』(三友社)全訳開始

7月7日 ごみ問題調査の役割分担決定

1班：本校生徒 2班：海外 3班：他県

4班：企業 5班：近隣地域の地方公共団体

7月16日 アンケートの実施

対象：本校全クラス生徒・職員・保護者

7月18日 アンケートの集計、ごみ問題の学習(4)

教材：新聞記事

8月10日 班ごとの仕事の確認、ごみ問題の学習(5)

教材：新聞記事

9月2日 ごみ問題調査の役割分担の変更

1班：本校生徒 2班：海外 3班：本校職員

4班：ごみ・環境問題Q&A

5班：クラスの保護者・地方公共団体

9月13日 報告書『ごみ・環境白書』の完成

9月14日 公開討論

9月21日 ごみ問題についての感想文(日本語と英語で)

2月5日(翌年) 生徒会執行部への提案

4. 取り組みの説明

この取り組みには、ごみ問題を学習する→校内版のごみ・環境白書を作成する→文化祭で公開討論を行う→取り組みの感想文を書く→ごみ対策案を生徒議会で提案し学校で実践する、という流れがあった。

ごみ問題の学習は、新聞のコラムの輪読→NHKスペシャルの視聴→担任の学校視察の報告→英文テキストの翻訳→新聞記事の輪読、という流れで進めていった。新聞コラムではまず自分の住んでいる近くの取り組みを、NHKスペシャルではNGOの活動を通して全世界の取り組みを、担任の報告では同世代の若者が学んでいる学校での取り組みを知ってもらうことを目的とした。また、英語の授業の一環であることも考えて、ごみ問題を英文で読む学習も取り入れた。このテキストは夏休みの補習教材・夏休みの課題として組み込んだ。その後の新聞記事による学習は、ごみ問題に関する記事が毎日のように新

聞に掲載されていることを生徒に気づかせる目的で、記事の選択は生徒が行った。

校内版の『ごみ・環境白書』は、次のような構成になった。

1. ごみと環境問題のQ&A
2. 本校生徒の意識と意見
3. 本校職員の意識と意見
4. クラスの保護者の意識と意見
5. 日本の取り組み
6. ドイツの家庭とごみ問題
7. 埼玉県立久喜高校の視察報告

1～6はクラスの5つの班が原則1つずつ担当した(2は全校生徒に対する意識調査を行ったためクラス全体で集計処理を援助し、4～6はインターネットでの検索作業もあって班の横断的な共同制作になった)。7は担任が担当した。

文化祭での公開討論は教室で行った。作成した白書をもとに、各班がそれぞれの分担した作業について報告し、個人としてクラスとして学校として今後どのように取り組んでいけばよいかを話し合った。

取り組みの感想文は日本語と英語の両方を書かせた。まず日本語で書かせ、英語は自分ができる範囲で表現させた。この書かせ方をういた意図に関しては、谷口(1994)を参照していただきたい。

生徒の感想で印象的だったのは、環境についての意識は皆ある程度あるのだが行動が伴っていないこと(たとえば教員のプリント類の配布や処理の問題を指摘する声もあった)、生徒1人1人が心がけることも大切だが学校という上からの指導がもっと必要なこと(たとえば規制がないからやらなくてもよいという気持ちになる、自分だけ実践するのは恥ずかしいという声など)、ドイツの環境問題に対する徹底した取り組みへの驚きなどである。

ごみ対策案の生徒議会への提案と学校での実践は、実際には生徒執行部への提案に終わってしまった。その理由として、この取り組みを行ったのが3年生であったため、10月以降は推薦入試、1月以降は一般入試への取り組みに私自身が忙殺されたこと、また担任として、受験を目の前にした生徒に対して積極的な生徒会活動をさせにくかったことが挙げられる。したがって、白書と対策案を生徒会執行部に提案し、実際の活動は後輩たちに委ねるということになったのである。

5. おわりに

この取り組みは、2つの国際理解教育の理論と実践のうちの「問題解決的アプローチ」に当たると思うが、「文化理解的アプローチ」の側面もあると言える。というのも、生徒の感想文から、ごみ問題についての異文化理解と自国文化理解が行われたと感じられたからである。

この取り組みには、英語学習という点でも国際理解教育という点でも、大きな可能性があると思う。作成した白書を英訳し、ホームページに掲載する、ごみ・環境問題について自由に意見を書き英訳し、海外の学校へ送る、メールをやりとりして意見を交換する、といった活動が考えられるからである。

さらに、ごみ・環境問題についての意見交換をきっかけに、さまざまな分野での情報交換や意見交換が始まる可能性もある。日常生活に関すること、生活習慣・文化に関すること、喜び・悲しみ・悩みなど心の内面に関すること、民族紛争・人口問題など人類が直面する重要課題に関すること、などなど。

ただ、今回の取り組みを学校全体の取り組みにまで高めることはできなかった。そして、英語教育と国際理解教育の指導者である私自身、先に述べた発展的な活動を日常的に行っていないと白状しなければならない。どうしてなのか。多忙さ故か、私の怠慢さ故か、他にも問題があるのか。機会があればまた考察してみたいと思う。

参考文献

- 佐野正之 他 (1995)『異文化理解のストラテジー』
大修館書店
谷口雅英 (1994)「オーラルコミュニケーションCの目標を達成する道筋を考える」『中部地区英語教育学会 紀要』第24号

参考資料：生徒会に提出した対策案

1. 生徒対象アンケート結果の考察

- (1) あなたのHR教室はきれいだと思いますか。
→6割以上がHR教室をきれいだと思っていない。
(2) 学校の中(トイレ・階段・廊下・校庭など)はきれいだと思いますか。
→約7割が学校の中をきれいだと思っていない。
(3) 現在、生徒会や厚生委員会が、ごみの分別に取り組んでいます。あなたは学校でごみを捨てるとき、

しっかり分別していますか。

→約4割がいつも分別しており、さらに約4割が
だいたい分別している。

- (4) 現在、厚生委員会が、ジュースの紙パックをたんでいない人に代わってたたんでいます。あなたはジュースを飲んだとき紙パックをきちんとたたんでいますか。

→約6割がいつもたたんでおり、さらに約2割が
だいたいたたんでいる。

- (5) どうしたらみんなが教室や学校をきれいにしようとし、ごみをきちんと分別し、紙パックをたたんだりするようになると思いますか。

→ごみ問題を勉強する 約4割
生徒会が運動をする 約3割
何をやってもムダである 約2割
先生が指導する 約1割

- (6) あなたの住んでいる市町村のごみの分別のしかたを知っていますか。

→約4割はだいたい知っているようだが、約6割はほとんど知らない。

- (7) 家庭でごみを捨てる時、しっかり分別していますか。

→約6割はだいたいしているようだが、約4割はほとんどしていない。

- (8) 環境問題に関心がありますか。

→関心がある人・ない人はほぼ半数だが、ある人がわずかに上回っている。

- (9) 3年7組では、いろいろな環境問題の中でもごみの問題が最も身近で大切なことだと考えています。あなたはごみの問題に関心がありますか。

→関心がある人・ない人はほぼ半数だが、ある人がわずかに上回っている。

- (10) Reducing (削減)について、次に挙げた項目の中であなたが心がけている事項があればいくつでも○をつけて下さい。

1 必要なものだけの購入	26%
2 最後まで使用	27%
3 食べ物を残さない	20%
4 過剰な包装商品を不購入	4%
5 カゴや袋を持参	4%
6 電気の節約	15%
7 ハンカチや布きれを使用	4%

- (11) Reusing (再使用)について、次に挙げた項目の中

であなたが心がけている事項があればいくつでも○をつけて下さい。

- | | |
|---------------|-----|
| 1 何回も使用可能物の購入 | 14% |
| 2 再利用 | 20% |
| 3 印刷物の裏面使用 | 11% |
| 4 レンタルの利用 | 13% |
| 5 中古品を購入・譲り受け | 15% |
| 6 不要物購買・寄付・譲渡 | 13% |
| 7 修理して使用 | 13% |

(12) Recycling(再利用)について、次に挙げた項目の中であなたが心がけている事項があればいくつでも○をつけて下さい。

- | | |
|----------------|-----|
| 1 ごみの分別 | 20% |
| 2 リサイクル商品使用・購入 | 13% |
| 3 紙や新聞・雑誌 | 19% |
| 4 牛乳の紙パック | 13% |
| 5 ペットボトル | 12% |
| 6 空き缶・空き瓶 | 8% |
| 7 食品のトレイ等 | 1% |

(13) これから学校でゴミ問題に取り組むとき、あなたが積極的に取り組めるものは何ですか。次に挙げた項目の中からいくつでも○をつけて下さい。

- | | |
|------------------|-----|
| 1 環境やゴミ問題の勉強 | 5% |
| 2 地域や学校の活動参加 | 3% |
| 3 ごみの持ち帰り | 7% |
| 4 ごみの分別 | 8% |
| 5 紙パックをたたむ | 10% |
| 6 過剰包装商品の不購入 | 4% |
| 7 カゴや袋の持参 | 3% |
| 8 電気の節約 | 8% |
| 9 再利用できるものの購入 | 5% |
| 10 再利用できるものの再度利用 | 5% |
| 11 印刷されていない裏面の使用 | 4% |
| 12 レンタルの利用 | 5% |
| 13 中古品を購入・利用する | 5% |
| 14 不要物の販売・寄付・譲渡 | 4% |
| 15 修理して使用 | 4% |
| 16 リサイクル商品を使用・購入 | 4% |
| 17 紙や新聞・雑誌のリサイクル | 3% |
| 18 飲物容器のリサイクル | 4% |
| 19 飲物容器の洗浄 | 3% |
| 20 制服・参考書類の寄付 | 1% |

2. 現在のごみ対策の取り組み

本校では各クラスに赤・青・黄色のごみ箱がある。赤には燃えるごみ、青には燃えないごみ、黄には本校の自販機で購入したジュースの紙パックをたたんで入れるようになっている。たたまれていない紙パックは厚生委員がたたんでいる。燃えないごみに関しては、瓶を無色・茶色・その他に、缶はアルミ缶とスチール缶に分別している。ペットボトルは赤・青の両方のごみ箱に混入していることが多く、ごみ捨て場で用務員のほうから分別するよう指示される。

3. ごみ対策案

ごみ問題では、3つの‘R’、すなわち Reducing(削減)、Reusing(再使用)、Recycling(再利用)がキーワードだと言われている。環境保全の点での優先順位は、Reducing>Reusing>Recyclingである。《具体的対策案》

(1) 半数以上の生徒が環境問題・ごみ問題に関心があるので、ごみ問題を勉強する機会を増やし、生徒会が積極的に取り組むことは効果的な手段である。たとえば買い物時は袋を持参する、教室の消灯をこまめに行うなどのキャンペーンの実施、ごみ問題の勉強会などを考えてはどうか。また、各教科やHRの先生、部活動の先生にも協力を依頼し、いろいろな面からアプローチしてはどうか。

(2) 削減を考える上で最も有効なのは、紙類について考えることである。というのは、燃えるごみで最も多いのは紙類であり、教室や学校で散乱している最も多いごみも紙だからである。そこで、教室に紙と雑誌を分別する箱を設置し、紙と雑誌は燃えるごみに捨てず、この箱の中にきちんと整理して入れてはどうか。週1回掃除のごみ捨て担当者はこれらを縛り、所定のところに持って行く。

(3) 再使用のために考えられることとして、卒業時に上級生が要らない物を学校に寄付する、あるいは要らない物を必要としているところ(災害地など)に送る、などが挙げられる。卒業式に、たとえば服類(カラー、ボタン、リボン、校章など)をクラス毎に回収し、欲しい下級生に譲れるようにしてはどうか。

(岐阜県立大垣北高等学校教諭)